

書評

国際開発の本流がわかる本

福田幸正
客員研究員
(公財) 国際通貨研究所

浅沼信爾・小浜裕久、2017、「ODA の終焉：機能主義的開発援助の勧め」、勁草書房

本著は、MDGs や SDGs に対する批判書だ。「時の国際開発オーソドキシィーに対する勇気ある提言」と、本の帯が踊っていてもいいと思うが、実際は「長年開発援助に関わってきた二人の著者による ODA 批判と再構築論・・・」と、いたって地味なものだ。が、この二人であれば奇をてらう必要はない。本著は最近の国際開発コミュニティの潮流に対する二人の強い違和感に基づいている。

MDGs や SDGs を巡る国際開発コミュニティの動きは「国連外交官と国際的な NGO の饗（狂）宴」と断じる。「貧困のない世界」、「人間の安全保障」、「国民総幸福量」といった普遍的な価値を表す理念に焦点を置いた結果、それを超えての議論はせいぜい目標を数量化するだけだった、と手厳しい。

MDGs/SDGs 批判はさらに続く (p.187)。

- 「明快な責任分担の枠組みもなしに、単に人道主義と連帯意識のみをベースに、世界をカバーする開発目標を立てて、全てのステークホルダーが責任をもって目的達成に貢献することは、幻想でしかない。」
- 「目的を達成するためにどうすれば良いのか。どんな政策手段を使うのが得策か。その政策手段を使って目標を達成するためには、どのような条件を満たす必要があり、またどんなインプットが必要とされ、目的達成努力のコスト・ベネフィットはどうか。これらの高邁な議論では、こうした問題提起も深い分析や検討もテーブルに乗せられもしなかったように思う。何よりも、経済発展や開発という社会の大規模な変化の全体像や将来のビジョンを意識しての議論はない・・・」
- 「ある特定の一時期の、ある特定国の、ある特定の開発課題に取り組んでいるものにとって、そんな議論は現実離れした抽象論だ・・・この現世で生々しい社会経済課題を考えている政策担当者にそんな余裕はない。もっと現実的な、具体的な課題に取り組まなければならない・・・」

FDI、国際資本市場からの資金の流れ、出稼ぎ労働者からの郷里送金が ODA を凌駕するようになって、ODA は途上国へのカネの流れのワン・オブ・ゼムとなった。MDGs/SDGs を巡る国際開発コミュニティの喧騒の中で、「第 2 次世界大戦後 70 年間にわたって、国際経済運営の重要な一部だった ODA を終焉に導かないためにも」(p.204)、基本に戻れと次のような ODA 再起のための提案をしている。

現在の ODA に期待される役割は、(1) 開発のための政策・制度づくり支援、(2) ハード、ソフト両面でのインフラ構築の支援、(3) 天災、人災および地球環境事業等に対する支援。そして、途上国政府が持っていない技術や政策技法や資金を提供することによって、途上国の貧困削減に貢献すること。そのために、国際開発コミュニティの中でパラダイム転換が起こるまで議論を惹起すること。

以上が本著のポイントであるが、最後に挙げられている現在の ODA に期待される 3 つの役割は、何らあたらしいものではない。特に (1) と (2) に関しては、日本の ODA は、ハード面で強くとも、制度面、ソフト面の貢献能力は低いと思われがちだが、実際には、得意なハードの開発を支援する中から必要な制度面、ソフト面の協力をからめている (はずだ)。今後とも、このようなプラクティスに自信をもって一層精励すればよい。これが本業だ。そして SDGs などの国際開発コミュニティでの議論には、とにかく上手く付き合っていってほしい。

インフラに関しては、最近の国際開発コミュニティの受け止め方は、ポジティブなものに変わりつつある。過去にはあれだけ日本のインフラ支援を非難しておいて、だ。これは、欧米ドナーが声高に進めた一般財政支援 (general budget support) の最近の退潮傾向の中から浮上してきたものなのだろう。とにかく、これは良い傾向だ。なお、インフラ再評価と同時に、直接貧困層を援助する条件付き現金給付 (conditional cash transfer) にも関心が集まってきている。

国際開発コミュニティに流行があっても、開発の現場は常に現実的、具体的な取り組みであることには変わりはない。そこには、ふわふわとした議論が入り込む余地はない。時の流行が入り込むことによって、多少現場に混乱が生じることがあったとしても、最後には down to earth な現場の営みだけが残る。これを「現場主義」というのであれば首肯できる。

本著の主張は、開発のプラクティショナーであれば、すっとんと腑に落ちるはずだ。そしてプラクティショナーたちは、自慢話などしない。汗と、時には泥にまみれ、黙々と働くだけだ。

二人のことだ。既にパラダイム転換の企てを開始したのだろう。そして勝算の確信を掴んでいるはずだ。ひとたび流れができれば後は早い。開発は、今も昔も、そして将来も、援助する国、される国の、現場のリアリティーに真正面から取り組む、寡黙なプラクティショナーたちが担っていることに変わらないのだから。